選考委員による作品講評

選考委員：今 道子、百瀬俊哉、瀬戸正人（副館長）

1）タハ・アフマド
Taha AHMAD (India, 1994)
何か物語を感じるし、それが何かを知りたいと思った。家族の話なのか。インドの写真は多く見ているが、その中でも力があると感じる（瀬戸正人選考委員長）

静かな風景の中にものすごく迫力のある人が存在しているところに、作家の力を感じました。とても良いと思います（今 道子選考委員）

インドの写真というと、混沌としたものを捉えた写真が比較的多い印象があるのですが、これらの作品は瞬間的な静けさと美しさが画面の中に凝縮されているところが良いなと思いました（百瀬俊哉選考委員）

2）アマノミツキ
AMANO Mitsuki (Japan, 1989)
氷と思われるが、地べたのようにも見える。黒の締まりや質感がとても綺麗な写真です。応募点数が少なかったのですが、もっといろいろ撮って欲しいと思います（瀬戸正人選考委員長）

冷たく繊細な世界を感じます。被写体がはっきり何か分からないのですが、丸い形の作品が好きです。（今 道子選考委員）

この形状と質感の面白さだと思います。他の作品も見ると、かなり器用な写真家だなと感じました。さまざまな可能性があると感じるので、いろいろな素材で撮り続けてもらいたいのがひとつと、もうワンサイズ大きかったら、もっと質感が伝わってきて良いのではないかと思いました。すごく繊細な作品なので、それを伝えるということをしてもらえたら良かったかと思います（百瀬俊哉選考委員）

3）ウェージャン・チャン
Wei Jian CHAN (Singapore, 1991)
かなり写真を撮っている人だと思う。ポイントをしっかり見抜いているし、鳩がブレて

いる写真が良かった（瀬戸正人選考委員長）

鳩がブレているイメージは、不安な感じもあり、何かの気配が感じられるところが良かった。黒の中に、凛とした雲の姿も美しいと思う。白の扱い方も私は好きです（今 道子選考委員）

かなり多くの写真を撮っている人だと想像します。この人のシャッターを押すタイミングがすごく魅力的で、被写体の発見もユニークだと思うが、作者の視線の面白さに惹かれました（百瀬俊哉選考委員）

4）オレクシー・チョイストーツィン
Oleksii CHYSTOTIN (Ukraine, 2000)
Y P2024 で３回目の収蔵となる注目すべき作家。ウクライナの現状の中で、撮らざるを得ないテーマを撮り続けている。これからも継続して欲しい（瀬戸正人選考委員長）

私自身も銀塩写真をやっているので、作品に懐かしさを感じます。その土地の歴史を映画で観ているような存在感がよいです（今 道子選考委員）

ウクライナの写真ということで注目して見ていました。破壊された場所も写っているが、正常時の日常を若い人の視点で捉えているところがポイント。劇的な瞬間ではないけれど、こういうところってあるのだろうなという写真の数々がとても魅力的（百瀬俊哉選考委員）

5）カスパー・ダールカル
Kasper DALKARL (Finland, 1991)
フィンランド独特のサウナ。他の国にはない習慣なので、ユニークで面白い。お母さんと息子の関係がもう少し知りたいです。なぜこの二人なのか？など、もう少し写真が見たいところ（瀬戸正人選考委員長）

フィンランドの人間と自然とサウナの関係が新鮮で、少し理解できたような気がしました。
どうして息子さんなのか謎めいたところが良いし、絵画にもなりそうです（今 道子選考委員）

全体を見た時に、なぜ母と息子なのか疑問を持ちましたが、映画のワンシーンみたいでとても美しいと感じました。写っている人の表情がとても不思議で、どういう会話でこういう表情になるのか、疑問はいまだあります。でも、その疑問と造り込んでいる美しさがうまくミックスしているところが、この作品を評価した点です（百瀬俊哉選考委員）

6）バスティアン・デシャン
Bastien DESCHAMPS (France, 1990)
世界中どこへ行っても同じ写真を撮っている。強烈な撮り方。日本に来て欲しくないほどパワーが溢れていて、写真的で面白いし、気持ち悪い（瀬戸正人選考委員長）

肉体が画面の中にギチギチにあって、 しつこいところが面白いです。コントラストが強いところも私は好きなので、強烈さが好みです（今 道子選考委員）

筋肉質な写真でパワーがある。コントラストも強いが、意外と諧調やディテールがよく見える出し方をしていて、すごく世界観を持っている作家だと感じました。それがダイレクトに伝わってきたのかなと思います（百瀬俊哉選考委員）

7）トマ・ヘルジャ
Toma GERZHA (The Netherlands, 2003)
二十歳ぐらいの写真家ということで、応募作品を見ると撮る対象がバラバラだった。方向性が定まっていないけれど、写真の力はある。選ばれたこの一点が良かったので、応援したい（瀬戸正人選考委員長）

グリーンっぽい色と、けだるそうな彼女が魅力的だなと思って選びました（今 道子選考委員）

最後まで選考委員の意見が分かれたのは、やはり内容がバラバラだったからだと思う。どれも良かったが、つかみどころがない。ただ、本人が楽しんで撮っているのがよくわかる写真だった。僕はこの写真をあまり暗いとは感じなくて、すごく優しく見ているなというのが、写された人たちの表情やしぐさから伝わってきた。これから頑張ってもらいたいと思う（百瀬俊哉選考委員）

8）黄
HUANG Ai (China, 2001)
カメラを使わず、印画紙の特性を使って作った作品。絵描きだからできる作品。絵描きのひとつの手法として見出した。写真としても評価したいと思う（瀬戸正人選考委員長）

現像液で描かれた作品でなくても、 絵画としても魅力があります。現像液と定着液を使ってこれを生み出したのはすごいなと思う。写真作品として応募しているところがインパクトがあるのかもしれません（今 道子選考委員）

この６枚の中でさえも、さまざまなトーンがあって、グラデーションが豊かなところが、この作品の面白さだと思う。いろいろな手法があって、それを受け入れるのもＹＰの良いところなのかなと感じます（百瀬俊哉選考委員）

9）川口 翼
KAWAGUCHI Tsubasa (Japan, 1999)
2022 年度ＹＰで収蔵した作品はモノクロで、今回はカラーへのチャレンジ。Ｙ P2022 の作品が記憶にあったので注目していたのですが、彼の中でもモノクロからカラーというだけじゃなくて何か変化があったのかな。撮影が違う段階に入ってきたなということは評価できると思う（瀬戸正人選考委員長）

風景の作品の色合いもいいですが、気になったのは、風景の中に人が入っていて、脚が二本。なぜここで切るのかなという感じもありますが、この入れ方が新鮮で。洋服を着た女性の姿も、顔も髪も脚も見えないけれど、風景に妙に調和していて、不思議でいいです（今 道子選考委員）

Ｙ P2022 で購入された作品を見ても、力のある作家だなと感じました。すごく力強い作品になっているのですが、撮っている場所は日常的な場所でもある。それをドラマティックなイメージに変換できる作家の力が感じられる作品でした（百瀬俊哉選考委員）

10）カイヤ&ブランク
Kaya & Blank (Turkey, Germany, 1990)
二人の作家のコラボレーション。この発想が大変面白い。実際にアメリカの通信会社が作ったとしたらそれも素晴らしいことだし、彼らが想像して作ったとしたら、写真以前

にそのアイデアも素晴らしい（瀬戸正人選考委員長）

この作品を見て「何なの？」という疑問が湧き上がりました。本物なのか偽物なのか？実際にあるような気もするし、実際にこんなオブジェがあったら楽しいなという気持ちもあるし。これだけ人に食い入らせる力というのがあるこの作品が好きです（今 道子選考委員）

私が今思ったのは、作者がユニットを組んでこれを見せるという時に、見る側としてはもう既に策略にはまったかなと感じて、その方法がすごく面白いなと思いました。アメリカの管理された自然を冷静な視線で、その一歩先なのか、未来なのかはわかりませんが、そういう境界線をうまく表現した作品と感じました（百瀬俊哉選考委員）

11）クガハルミ
KUGA Harumi (Japan, 1995)
Y P2023 でも収蔵した作家。昨年の作品で話題になった点は、中心がないということ。それが特徴で、今回も継続している。写真表現のすごく狭いところを攻めている。そこに写真の可能性を見出そうと思った（瀬戸正人選考委員長）

Y P2023 ではストレートにインパクトがあって、記憶に残りました。今回は少し幅が広がったのかなと感じています。ストレートな作品が好きですが、今後に期待したいです（今 道子選考委員）

霧の中で見ている映像という印象を持った。応募作品の中で、強いポイントが在ることによって違和感を感じた作品はあえて選ばなかった。作者の世界観をぜひ保ってもらいたいと思う（百瀬俊哉選考委員）

12）キャン綾菜
KYAN Ayana (Japan, 1992)
わかりにくい部分もあるが、動物やモノの美しさにちゃんと向き合っているという良さがある（瀬戸正人選考委員長）

動物を撮る時、表情とか目とか気になるのですが、この目の外し方が面白いのと、毛の質感の作品とか、作者の感覚が面白い（今 道子選考委員）

選ばれた作品は質感がダイレクトに伝わってくるイメージが多いけれど、他に風景的な写真も撮られていたので、少しつかみどころがない写真ではあると感じた。最終的に選ばれた作品は、「何だこれは？」という瞬間的な疑問から始まって、観ていると、どんどんひき込まれていく写真が魅了的だった。今後に期待したい（百瀬俊哉選考委員）

13）李 若琦 / リ・ワカキ
LI Ruoqi (China, 1996)
まだポイントが定まっていない作家だと思うが、枯れた葉っぱや芽はインパクトがある。ポイントをはっきりさせて攻めていったら良くなると思う（瀬戸正人選考委員長）

つぼみのくしゅくしゅの質感や、動物のもこもこの質感や枯れた葉など、触覚的な感覚の鋭い作家なのかなと思って選びました（今 道子選考委員）

見た風景や出会ったことの表層をたどるようなことが得意な作家だと思う。もう少し続けて、継続して応募してくると、表層でありながらも、それが多層となって写真が強くなっていくと思う。今後に期待したい（百瀬俊哉選考委員）

14）李 也曾一 / リー・イェジェンイー
LI Ye Zeng Yi (China, 1992)
写真的実験をする人はよくいるが、この大きさにプリントすることは結構難しい。それをやろうとしている情熱を感じる。特に女性の顔が真ん中で割れているイメージが好きです（瀬戸正人選考委員長）

勢いがあるし、自信も過剰にありそうだし、その勢いが見ていて楽しい。どうやって作るのかわからないけれど、何でもありというところ好きです。どちらかと言うと 絵が描いてない方がインパクトを感じます。レトロのような、その世界を終わらせないでほしい（今 道子選考委員）

つかみどころがないところはある。ただ、いくつかのプロセスをこの大きさでやるという情熱と、本来とても繊細な暗室作業がワイルドな感じで作品から伝わってくるのは事実。あとは、ここから作者がどう展開していくか見ていきたいし、とても楽しみ（百瀬俊哉選考委員）

15）グロリア・リズデ
Glorija LIZDE (Croatia, 1991)
セルフポートレイトだけれど、とても暗さを感じる。写真的には自分の思いがしっかり捉えられている。腐った果物に虫が止まっている写真が好きです（瀬戸正人選考委員長）

ガスレンジの上に頭を乗せている、つまり熱いイメージがあるところに、頭を乗せるというこの風景を見ると、静かな人だけれど、強い意志がある人なのだなと思いました（今 道子選考委員）

セルフポートレイトなので、本人のしぐさなどを見ると心が整理されていないのかな、思いが複雑なのかなという感じを写真から受けとった。自分の中の葛藤のようなものを写真に展開していこうというところにエールを送りたいと思う。それぞれかなり特徴のある、普段目につかないようなものをターゲットにしているなど、作者の眼差しは面白いと感じました（百瀬俊哉選考委員）

16）丸山達也
MARUYAMA Tatsuya (Japan, 1998)
日本人らしくないところが彼の良いところだと応援してあげたい。でも、ニューヨークを撮るとどうしてもこういうふうに写ってしまうという甘さもあるので、もう少し現場に混乱させられないように、自分自身を持ってこれからは撮って欲しいなと思います（瀬戸正人選考委員長）

私は、このジーンズで寝ている人が新鮮でした。これがニューヨークじゃないとどんな写真になるのかなと興味を持ちました（今 道子選考委員）

僕が面白いなと思ったのは、画面にすごく情報量があると思ったこと。そのためかカメラが傾いている。それはある意味欲張りだけど、それがこの人の眼差しであり、これからの可能性を感じる。いろんな場所で撮影してもらいたいなとすごく感じる写真家です（百瀬俊哉選考委員）

17）セルゲイ・メルニチェンコ
Sergey MELNITCHENKO (Ukraine, 1991)
今回選ばれた作品の中で最もインパクトのある強い写真だと思いました。プロジェクシ

ョンしている風景はウクライナの廃墟で、そこにいる人と投影された今のウクライナの現状がとても生々しく、悲しみが伝わってくる。二つの映像が重なることで強まった写真だと思う（瀬戸正人選考委員長）

投影されたウクライナの廃墟が、人間が負った傷のようで、痛みを持った人間がそこにいるということがより強調されて、とても良い作品だと思います（今 道子選考委員）

プロジェクションをしてポートレイトを撮るという手法は新しいことではないと思うが、今のウクライナの現状がダイレクトに伝わってくる。投影された映像の前に立つ人々の表情を見ると、写真の情報以上に彼らの叫びが伝わってくる写真だと思います（百瀬俊哉選考委員）

18）森 凌我
MORI Ryoga (Japan, 2001)
５点のうちの１点に、首の生々しい皮膚感のイメージがあり、他のイメージとは違うが、とても良かった。これからテーマにしていくひとつのヒントになるかなと思う。他の４点は、理解し難いモノを何か作り上げようとしている気持ちがよくわかる。もっと追求していって欲しい（瀬戸正人選考委員長）

何か絵画のように見えて綺麗なのですが、興味を持ったのは、どちらかというと首の写真。鳥肌が立った質感が美しいなあと思うし、作者にもっと肉体を撮ってほしいと思います（今 道子選考委員）

リアルな不気味さが目を引きました。一部の世界観は難解な部分もあったので、１枚目の写真をきっかけにもっと自分の世界観を重ねていって、制作を継続してもらいたいと感じました（百瀬俊哉選考委員）

19）西山 廉
NISHIYAMA Ren (Japan, 1995)
一見脈絡がないけれど、何かしらを感じさせる写真。そういう写真が比較的最近見受けられるようになったというように思う。若い人たちが、今までの写真のストーリー性などを無視して動きたいのだなという感じがして、とても新鮮です（瀬戸正人選考委員長）

脈絡がないのですけれど、一つひとつがハッとするような新鮮な感じもします。カーテンも普通のカーテンなのだけれど、何か今まで感じたことのないカーテンの存在感の雰囲気があり、人が飛んでいるピュアな感じもあるし、見ていて気持ち良い写真だなと思いました（今 道子選考委員）

この作家の撮っている事や場所はバラバラなのですが、眼差しは共通しているように感じます。光を読む力もあると思うし、被写体に反応する、モノを発見する力がある作家だなと思いました（百瀬俊哉選考委員）

20）大島宗久
OSHIMA Munehisa (Japan, 1990)
北海道の冬と思うが、雪の結晶や岩山のイメージが良い（瀬戸正人選考委員長）

車の中から見える風景や、雪原の中のビニールハウスや霜を繊細に捉えていて良いと思う（今 道子選考委員）

この作家が被写体を発見した時の距離感がすごく統一されていて冷静な人だなと想像しました。一般的に、写真を撮り出すと興奮して近づいて行くが、一定の距離感で撮っていくという冷静さが力強さとなって展開している作品群。最終的に選ばれなかった作品にも魅力的なイメージが多かった（百瀬俊哉選考委員）

21）富樫達也
TOGASHI Tatsuya (Japan, 1989)
〈像の旅〉という抽象的なタイトルで、脈絡のないイメージ群。フィルムで撮ったものを複写してデジタル化しているところが面白い。過去のＹＰでも収蔵しているが、一貫して同じテーマで制作している。写っているモノの脈絡のなさが気になるところで、そこが良いと思う（瀬戸正人選考委員長）

これらの作品の中で一番気になったのは、電線が密集しているイメージ。脳の中の状況を観ているようで迫力があります。こんな作品が観たい（今 道子選考委員）

撮影からプリントにたどり着くまでいろいろなプロセスを経ている作品で、そのプロセスの中に旅というか、時空を感じるというか、その面白さは僕も味わえた気がします（百瀬俊哉選考委員）

22）吟茜

Uta Akane (Taiwan, 1989)

どれもしっかりとした写真です。６×６は難しく、ポイントを押さえないと成立しないタイプの写真だが、相当うまいと思う（瀬戸正人選考委員長）

私は食材を撮っている写真家なので、食べものというのはとてもエロティックでもあり、欲望の対象でもあり、それを狙う猫やインコの眼差しにとても共感できます。特に切り身を見ているインコが印象的です（今 道子選考委員）

非常にオーソドックスな写真だけれど、技術的にもしっかりしている。市場なので、雑踏だと思うが、その中で被写体と向き合いながらも、スナップショット的な要素もあり撮影しているところがこの作家の良さだと思う（百瀬俊哉選考委員）